

中盛彬の『かりそめのひとりごと』はおもしろい

橘弘文

1 はじめに

(1) 出口神暁編・校訂 1967 『拾遺泉州志（かりそめのひとりごと）』 和泉文化研究会

(2) 中盛彬（1781-1858）：降井家（中左太夫家） 熊取谷の大庄屋

「国学的世界観を西洋天文学と融合させた」

（桑原恵 2004『幕末国学の諸相』大阪大学出版会）

「…自然科学から人文科学、芸術にいたるまで幅広い業績を残しており、単なる好事家ではなくてむしろルネサンス的万能とでもいうべき研究者であった…」

（小川望 2008『焼塩壺と近世の考古学』同成社）

(3) 『かりそめのひとりごと』：「熊取を中心とした泉州地域の歴史・故事・逸話」

（熊取町史編さん委員会編 2000『熊取町史 本文編』熊取町）

2 『かりそめのひとりごと』の資料・対象・視点

……雨にも風にもこととふものしなければ、いとわびしきに、日はながし、あめはふる、つとめはしげからず、させるかどはなし、いかに天日を送り、つきをむかへむ、いとせんすべきなきままに、よしなきことがら、ふみに、みおよび、ひとにききすごせしことの、あが州にかかれるかぎりを、おもひいたすまま筆にまかせてかひつけぬ。（冒頭の部分）

(1) 『かりそめのひとりごと』の資料

「ふみ」	「ひとにきき」	「みおよび」
文献資料	言い伝え（口頭伝承）	実見・観察
過去	過去/現在（同時代）	現在（同時代）

(2) 『かりそめのひとりごと』の対象

「あが州」（わが州）＝泉州の地形

北側	東側	南側	西側
新大和川	河内台地…金剛山地	和泉山脈	大阪湾

(3) 『かりそめのひとりごと』の視点

① 現在と過去のつながり：

② 自然（環境）と人+道具と人+出来事と人：人間への興味・人間の不思議さ

「飲食物の産地や銘柄を言い当てる人びと」

（「物を食うてその産地を知る人々」：出口神暁氏が付けた項目名）

今の麻生中村紋治が父宗右衛門は鼈を好みてつねに喰ひぬ。その風味にて産所を知ること奇妙なりし。こは久米田池のぞといふに一つも誤ることなし。或人怪しみて下和泉にて取し鼈を大津の淵にて養しを喰はせて試みさせしに、こは知りがたしおそらくは鳥取わたりにて取しをここの池にて養ひけむといへり。……

人名	飲食物	産地・銘柄
麻生中村の宗右衛門	鰻（スッポン）	久米田池・下和泉（鳥取）・大津
名越村の長左衛門	ナス	上之郷
柏木六兵衛	水	淀川・犬鳴山の滝水
岸和田藩士神西	茶	折鷹・喜撰・若緑・萬代…

3 泉州の沿岸と人びと

(1) 沿岸の風景の特色と変容（「岸の姫松」）

昔は住吉の松の林に、波うちかけしといふ。吾みても久しくなりぬちふ、岸の姫松は浪うちぎはの岸にして、住吉より湊村を経て、小島の里までつづきて、偃蓋（えんがい）葱龍（そうろう）たりしとかや。今の浜寺（大雄寺旧趾也）高石の宮、大津の鳥の森、岸の和田の石垣筋、瓦屋村の茨住吉の森、その西の五本松、佐野村新町の六本松、はぐら崎の北なる九本松など、みなその跡なり。樽井村の北にては聊（いささ）か、昔のすがたはこのこれり。

昔の泉州の沿岸の松林	盛彬の時代の泉州の沿岸の松林
住吉～湊村～小島：泉州沿岸の一带	浜寺・高石の宮・大津の鳥の森・岸の和田の石垣筋・瓦屋村の茨住吉の森・茨住吉の森の西の五本松・佐野村新町の六本松・はぐら崎の北の九本松・樽井村の北

(2) 「佐野の浦の戎」という名産の貝（「佐野村戎明神浦の朱色貝」）

- ① 正保の頃（1644-48）に海辺の佐野村戎明神社が修復され、朱で塗られる。
- ② 朱の祠と玉垣が海面に映る。
- ③ 浜辺の貝が朱色になる。
- ④ 人びとが珍しがって採る。
- ⑤ 3、4年の後に貝の色はもとの色にもどる。
- ⑥ 盛彬の時代に伊勢の人が「佐野の浦の戎」という名産の貝を探しに来た。

※言い伝え＋うわさ

佐野村戎明神社＝泉佐野市本町の浜出神社？

浜出神社は明治41年（1908）1月に泉佐野市春日町の春日神社に合祀された（井上正雄1922『大阪府全志』巻之五 大阪府全志発行所）。

(3) 脇浜の竜王廟（「脇浜村佐々木久左衛門」）

- ① ある年の夏の早魃（かんばつ）。
- ② 射術拳法に練達した脇浜村の佐々木久兵衛が、藩主の命を受けて、脇浜の竜王廟に一命をささげ祈雫（きう）し、鳴弦する。
- ③ たちまち雨が降る。

- ④ ほどなくして佐々木久兵衛が死ぬ。

[脇浜の竜王廟]

寛政8年(1796)刊の『和泉名所図会』(秋里籬島著・竹原信繁画)

「龍王宮(りゅうおうのみや)」:

近木崎の浦にあり。石室の社也。例祭、八月十一日、此辺、海浜にして、風景の地なり。

朧(おぼろ)夜や海とひとつの龍(たつ)の宮 斑竹

(堀口康生校訂 1976『和泉名所図会』柳原書店)

脇浜の竜王社の「竜神の雨壺」という泉

(高谷重夫 1982『雨乞習俗の研究』法政大学出版局)

※言い伝え

- (4) 春木村の又兵衛の娘おもえと夏の陣(「春木村の又兵衛の娘」)

- ① おもえは幼少期から水泳を好む。
- ② 忠岡村の男性と結婚。
- ③ 離婚後、大坂城の淀殿に仕える(名を幾瀬・白井)。
- ④ 夏の陣(1615)→堀に飛び込む…水門…大川…藤堂泉州の陣前に浮かび出る。
- ⑤ 春木村に帰る。

☆おもえが淀殿にもらった扇子と櫛はらい:

……この時に淀どのにもらひたりし、金の黒骨の扇子と、鼈甲の板に虎の毛をひしとうへし、くしはらひとを、もとりものもとにおしかふてかへりしが、今もこの家にもちつたへたり。わも、こぞの秋みつ、よくこころたけき女なりしにこそ。

★盛彬は春木村の又兵衛家に伝わる金の黒骨の扇子と虎の毛の櫛はらいを実際に見ている。
?金の黒骨の扇子と虎の毛の櫛はらいの→夏の陣の記憶

※言い伝え+実見

- (5) 江戸で発掘された塩壺(「泉州麻生と泉湊伊織の塩焼壺」)

- ① 文化4年(1808)、文政元年(1818)に江戸の大名屋敷で、「泉湊伊織」の銘の塩壺と「泉州麻生」の銘の塩壺が発掘される。
- ② だれかが、それらの塩壺の図を岸和田の楽斎にもたらす。
- ③ 盛彬が岸和田の楽斎の家でそれらの塩壺の図を見る。
- ④ 塩壺の図と楽斎の意見と『世事談』の記述をふまえて盛彬が考察する。

楽斎の意見: 泉州の湊という里

大鳥郡のみなと	日根郡中通の湊村	麻生郷津田村の古称
湊紙・湊陶・塩壺の名産	中の庄さの村の分村	この里で塩を焼いた者の子孫が塩屋源兵衛。今も貝塚に住んで花塩を製している。

『世事談』の記述:

天文年間（1532-55）、洛の上鴨畠枝村の藤太郎という者が、泉州湊村に住み、紀州雑賀塩を土壺に入れて焼き、諸州に売った。壺屋藤太郎と号した。承応3年（1654）に女院御所より天下一の号を賜った。延宝7年（1679）に鷹司殿下より折紙状をもらった。呼び名を伊織と号した。猿丸太夫の末裔と伝えられている。

（菊岡沾涼「本朝世事談綺」『日本随筆大成 新装版 <第二期>12』吉川弘文館 1994）

盛彬の考察：

「泉湊伊織」の銘の塩壺：大鳥郡の湊村・伊織を名乗る塩壺屋

「泉州麻生」の銘の塩壺：麻生郷津田村の塩屋源兵衛

☆中盛彬の考察はきわめて高く評価すべき（小川望 2008『焼塩壺と近世の考古学』同成社）。

※図＋文献＋言い伝え＋図の模写

（6）泉州の南界、小島の里のもてなし（「小島の里」）

旅人が小島の家に宿泊すると、その家の妻が旅人を性的にもてなしたという。このもてなしは盛彬の時代には、ほとんどみられなくなっていたが、小島の周辺の村の糸引き唄に伝承されていた。

「小じまふか瀬のなかよきふねは ひとがのるとてあさくはならぬ」

「小島女藤に子種（こだね）がなくば あすもとまりてちぎらんものを」

☆「小島の里は、この州の南界」…辺境のイメージ？

※言い伝え（小島の近くの村の糸引き唄）

4 中盛彬と泉州の山

（1）中嶺盛と葛城山の竜王（「葛城山の石の宝殿」）

- ① 岡部長富公の狩猟に中嶺盛（盛彬の祖父）が随行する。
- ② 申の刻に白鹿が出現する。
- ③ 人びとが白鹿を射るが、白鹿に当たらず、白鹿は葛城山の麓にかくれる。
- ④ 嶺盛は、そばの人に「この鹿は神だろう」と言う。
- ⑤ 突然の大雨と雷。嶺盛は長富公を避難させた後、山頂に伏して身代わりとなる。
- ⑥ 空が晴れる。嶺盛が竜王に石の宝殿と霊垣を建立する。
- ⑦ 霊垣の一部が紀州の村にかかり、紀州の村がその霊垣の部分を切り除く。
- ⑧ その村に疫病が流行し、多くの人びとが亡くなる。
- ⑨ 葛城竜王のたたりと考え、竜王に詫びると疫病がしずまる。

☆岡部長富公と中嶺盛の関係/葛城山と狩猟/白鹿の出現/葛城山の竜王の社殿と霊垣の建立/葛城山の竜王と疫病の流行

※言い伝え＋文献

（2）蕎原村栃の木谷の栃の木（「蕎原村の栃の木」）

蕎原村栃の木谷の栃の大木＝栃明神/高野先達が修行祈祷する場所

盛彬が父から聞いた話：

岸和田藩の藩士が農業をすすめるための役目で蕎原村に来ることになった。その役目の藩士は有名な栃の大木を見たいと言ってきた。蕎原村の村長は栃の大木に至る道を苦勞して作った。ところが藩士が来る前日に雷をともしう嵐が起これ、その道は見えなくなってしまった。この神木に至る道を作ったことを神が怒ったにちがいないと恐れ、藩士の大木見学はとりやめになったという。

盛彬が友人たちと栃の大木を見にゆく：

道のない山を登りくだりして午後3時ごろに到達する。

木の周りは約17m（五丈三四尺）、幽邃（ゆうすい）にして、深樹翳鬱（おううつ）。

盛彬は、この栃の大木の株を持ち帰る。

※言い伝え＋実見＋採集

（3）河合村の鍋山と鍋山の石の硯（「河合村の鍋山」）

河合村鍋山は、まさに鍋をふせたような形をしている。この山麓の石はとても軟かい。

盛彬は鍋山のふもとに行き、石をさがし、硯とする石を得た。

※実見＋採集

5 国府の清水と一兵衛家の水桶

① 国府の一兵衛は大坂城で料理人をしていた。

② 秀吉が大坂城にいる間、お茶用に国府の清水が用いられることがあった。

③ 一兵衛が国府の清水を案内した。

④ 一兵衛の家に国府の清水で水を汲むときに使った水桶が伝わっていた。

⑤ 一兵衛の家が火事になり、この水桶も焼失した。

☆盛彬は、その火災の前に、その水桶をじっさいに見て、模写した。

★寛政8年（1796）刊の『和泉名所図会』（秋里籬島著・竹原信繁画）「府中清水」

（堀口康生校訂1976『和泉名所図会』柳原書店）

※言い伝え＋実見＋水桶の模写

6 出来事の記録

（1）宝永4年（1707）の地震（「宝永四年の地震」）

盛彬の祖父の体験：

宝永4年（1707）10月4日午後2時ごろに地震が起きた。地震が起きたとき、盛彬の祖父は岸和田にいた。祖父は、これは大変だと急ぎ帰ることにした。池の堤が崩れ、男女が逃げ惑っていた。王子川の水かさが増えていたので、祖父は人足の助けを借りて王子川を渡って家に帰った。

在宅していた中武左衛門の体験：

立つとこける、また立つとこける。子どもの走るようにして帰宅した祖父に近づいた。

岸和田の状況：

大手の前まで海水につかり、庭の手水鉢や唐臼の壺の中に、カレやコチが泳いでいたという
※言い伝え（盛彬の父から）＋文献（被害報告）

大阪の状況：小浜の豪商、木崎惕窓（1688~1766）の「拾椎雑話」から

（校訂者：法本義弘 1974『拾椎雑話・稚狭考』福井県郷土誌懇談会）

宝永四年亥十月四日午刻、大阪大地震にて堂島の辺新地の分ことごとく家つふれ地震にて死するもの凡五千人、夕飯を未焼さる時分ゆへ火事なし。地震止て家々夕飯を焼、飯のにへたる時分津波来る、一旦引て又来る、道頓堀にて汐の高さ一丈、死するもの一万三千人、地震の時、家は危し船は気遣なしとて婦女子供老人皆々舟にのせ置しか、津波にのかるるはなし。此時川尻に千石より千五百石積五艘、又四千石積大通丸といふ大船流込、小船の分は多く此下になりて崩れ、或は半破れなり。橋々は此船にて落る。汐引候て舟平地に居り、後に解きて取りぬ。高麗橋内町辺は少も汐のかまひなし。此節吹田吉右衛門大阪に居合候直談なり。

（2）七山村の刑部作の油瓶の不思議な現象（「七山村の刑部作の油瓶」）

- ① 宝永元年（1704）9月：七山村の農夫刑部作が畠で死んでいた老狐をねんごろに埋葬した。
- ② 享保2年（1717）5月5日の夜：岸和田から戻って来た刑部作が、使い終わっていた油を買い忘れたことに気づく。刑部作の女房が油瓶を傾けると、油が竹筒に七部目ほど出てくる。
- ③ 5月5日の夜の女房の夢：産砂神春日明神の年番神主仁右衛門の子仁兵衛と思われる人が、浅黄の単物（ひとえもの）を着て、木の杖をついて、座敷から現れる。
- ④ 5月25日：竹筒の油を使い切る。とくり（油瓶）を傾けると、皿に七部目ほど出てくる。この以降、必要な時にとくり（油瓶）から油が出てくるようになる。「刑部作の湧あぶら」と評判になる。
- ⑤ 享保3年（1718）正月9日：村人が刑部作の家に集まり、「刑部作の湧あぶら」を実験する。
- ⑥ 享保3年（1718）7月25日：藩主が鷹狩りのついでに刑部作の家に立ち寄り、刑部作の油瓶を見て、刑部作にお金を与える。
- ⑦ 享保2年（1717）から宝暦2年（1752）までの36年間、とくり（油瓶）から油が湧出する。
- ⑧ 月寒和尚が、この不思議な現象は、狐のおかげではなく、刑部作の宿因によるという記を著してから、油は出なくなった。それで人びとは、油の湧出は「きつね福」だと言い合った。

☆「刑部作の湧あぶら」は盛彬の生前の出来事であるが、刑部作の油瓶じたいは、盛彬の時代にも刑部作の家に伝わっていた。盛彬は見に行った。盛彬によれば、刑部作の油瓶は、1升2合入りの備前焼で、口のところが少し欠けていたという。

※言い伝え＋文献＋実見

(3) 明和の頃 (1764-72)、谷川港に停泊中の船で起きた怪事件 (「谷川湊の妖怪」)

- ① 停泊船の異常：日がのぼり、谷川港に停泊していたほとんどの船は活動をはじめたが、阿波の国の船だけが揺れていなかった。仲間の船の人びとが不審に思って、阿波の国の船に入ってみると、乗船員の男性たちは「漏精して」死んだような状態だった。すぐに医者を迎えて治療すると、彼らの意識が戻った。
- ② 阿波の国の船の乗船員たちの証言：どこからともなく、とてもなまめかしい女性が現れて、誘ってくる様子は、この世の人とは思われなかった。淫らな心をおさえることはできなかった。この女性と交わると同時に意識を失ってしまった。
- ③ 谷川の徳右衛門の証言：いつものように早朝に起きて港の方を見た。すると後ろの山から、とても美しい女性が、腰のところをおおっただけのほとんど裸の姿で現れた。港には多くの船が停泊していたが、この女性は阿波の国の船に入った。ああ、変だなと思って見ていると、しばらくして、その女性が船から出て来て、もとの山に帰って行った。
- ④ 谷川の人びとの解釈：不思議なことだが、誰の仕業かは、よくわからない。
- ⑤ 貝塚の源兵衛がその女性の姿について関係者に尋ねる：
[徳右衛門父子]…普通の人とは違っていたと思うが、遠くから見たので、細部はわからない。
[阿波の国の船の乗船員] …夢心地だったので、よくわからない。
- ⑥ 後に盛彬は源兵衛を通じて、この事件を知る。

☆盛彬の解釈：本草学における野婆山姑（やまうば）？……未確認生物

※うわさ+記録+模写（貝塚の源兵衛が描いた女性図の模写）+解釈

(3) 片足を移植された人 (「生ける人に死人の足を接ぐ」)

文化 11 年 (1814) か文政 9 年 (1826) 6 月：筑前の大岬で嵐のために多くの船が破船し、数百人が亡くなった、と聞く。

同年 11 月 18 日：この事件の生存者の一人が、熊野へ帰る途中、泉州の道を通った。この男性は包んだ片足を膝から折り曲げて、首にかけた麻縄にその片足をくくりつけ、もう一つの足と竹杖を使って歩いていた。

この生存者の証言：

熊野船の炊事係。破船のさい、乗船員はみな、念仏を唱えて海に飛び込んだ。流されともなく泳ぐともなくしていると、岩の間に手がかかったので、岩の上にあがった。そして片足がないことに気づいた。ああ何としたことかと驚いたが、すぐに気を失い、その後、自分の体がどうなったか、わからなかった。意識が戻った後、人に聞くと、地元の人びとが医者（薬司）を連れてきた。その医者は、私の片足がないのを見た。そして近くの破船に足が一つあった。医者は、これは女性の足だが、とりあえず付けてみようと言い、私の体に付けたという。それで、骨は接続していないから立つことはできないが、血は通っている。

盛彬の観察：片足の包みをとかせて観察する。若い女性の足。肉厚でつやつやしていて白く、なまめかしい。

盛彬の友人たちとの意見の交換：

生きている人に死んだ人の足を付けることは、生きている木に枯れた枝を接続することに似ている。血が通い、寒熱痛痒を感じることは道理に合わないが、それならばどうしてあのようにつやつやしているのか？

まだ生きている女性の足を切断して、すぐに移植したのではないだろうか。

※ニュース＋当事者との出会い＋実見・観察＋意見交換

7 おわりに

(1) 柳田国男の『遠野物語』（初版 1910）の世界との重なり

① 言い伝えと記憶：盛彬の記憶・降井家の記憶・泉州の記憶

② 小盆地宇宙としての泉州：「…日本列島におよそ百を数える地方的な社会文化的な統合があった。それはいわば、日本列島の文化の単位であった。」

（米山俊直 1989『小盆地宇宙としての日本文化』岩波書店）

(2) 熊取町へのお願い

熊取町の住民の方々をはじめとして、多くの人びとが読むことができるように、現代語訳・注釈付きの『かりそめのひとりごと』を刊行してください！

建築家・田根剛のことば

「場所がもっている記憶はそれにちゃんと力を与えた時に未来を生み出す原動力になる」

（田根剛・瀧口範子 2018『田根剛 アーキオロジーからアーキテクチャーへ』TOTO 出版）